

柴崎 浩●著

『神経診断学を学ぶ人のために』

書評者 田代 邦雄（北大名誉教授／北祐会神経内科病院顧問）



神経学，神経内科学，神経症候学，神経生理学，神経病理学など，神経に関する書名のある教科書はわが国においても数多く出版されているが，「神経診断学」を冠するものとしては，本書の著者である柴崎浩先生らがまとめられた「ダイナミック神経診断学」（柴崎浩，田川皓一，湯浅龍彦 共編）とする分担執筆があるのみである。

このたび，柴崎浩先生（著）の単行本が世に出ることとなったことは画期的であり「神経診断学とは何か！」が語りかけられることとなった。本書の意図，特徴はその序に詳しく述べられており，その内のエッセンスの一部をそのまま引用すれば，“少し熟練した神経内科医であれば，典型的な疾患をもつ患者が診察室に入って来た場合，その瞬間にほとんど直感的に診断をつけられることが稀でない”，しかし“症候から種々の可能性を考慮に入れて病歴聴取と診察に当たり，理論的・系統的に考えて正しい診断に到達するのが妥当な方法である（序より一部引用）”という言葉に集約されると思われる。

本書は，膨大な神経学の知識と，米国での神経内科レジデントも修められた臨床経験，さらには現在も臨床神経

生理学の世界的権威として誰もが認める存在である先生が，神経学の原点とも言える「神経診断学のエッセンス」を明解に説いておられる珠玉の名著である。

第1章「神経疾患の診断（総論）」から第31章「検査方針の立て方」，そして主要文献一覧と，最後に「神経学をこれから学ぼうという人へ—あとがきに代えて」という締めメッセージまで実に細やかに神経診断学の極意を解き明かされたことに感動する次第である。

本書の読み方はいろいろあると考える。まず全体を通読し先生のコンセプトを理解することをお勧めしたい。それは，過去の教科書の引用ではなく，それらを踏まえ，しかし，すべてを自分の目でみるという先生自身による信念が感じられ，実に読んでいて楽しく，先生から直接手を取るように指導をいただいているような実感がわいてくるからである。

本書は通読も可，しかし興味ある項目ごとにピックアップし，自分の考えと比較してQ & Aを想定し，柴崎先生との対話，意見の交換，さらに論議する，という楽しさもわき上がって

る。すなわち自分の手技や考え方と比べてお互いの主張を戦わせることも大切である。

神経診断学には流派による違いもあるであろう。しかし，本書ではそれら理解された上で，ご自身の経験を踏まえ，より理解しやすいように語りかけるといふ配慮が随所に感じられるのである。

本書が“神経診断学を学ぶ人のために”大きな道標になり続けること，ひいては日本の臨床神経学の向上，更なる発展への原動力となることを確信する次第である。

先生は1964年九大卒，在日米陸軍病院インターン，九大神経内科，そして米国での神経内科レジデントと臨床神経内科医であるばかりでなく，英国，米国，そして世界の神経学・脳科学のリーダーとともに日本の代表としてのご活躍は周知の事実であり，先生の今後ますますのご発展を心からお祈りする次第である。

B5 頁352 2009年 医学書院刊
定価 8,925 円（本体 8,500 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00799-3]